

域切除 5 例, 部分切除 5 例, 非切除 5 例) である。使用した放射性医薬品は ^{99m}Tc -GSA 185 MBq である。データ収集は, 心臓と肝を含む全面像で 30 分間行った。データ処理は, Dynamic data から肝と心臓に ROI を設定し, Time activity curve を得た。また, ^{99m}Tc -GSA 投与後, 5-6 分の Planar 像を作成し, 視覚的に 5 段階に分類し検討した。

非切除例は Grade 3 以上に多かった。切除例では Grade 2 以下が多く, 手術前後で著明な差異はなかった。このことは手術適応を決める手段の一つとなりうる可能性が考えられた。

11. 皮下埋め込み式ポートを用いた肝悪性腫瘍動注化学療法における ^{99m}Tc -MAA flow scintigraphy の有用性の検討

松浦 隆志 鶴 博生 (国立大分病院・放)
古田斗志也 原口 勝 (同・外)
室 豊吉 原 修身 (同・肝セ)

1990 年 8 月から 1994 年 1 月の 3 年 6 か月の間に国立大分病院にてリザーバーによる動注化学療法を行い, かつ ^{99m}Tc -MAA による肝血流シンチを行った肝悪性腫瘍患者 19 例についてその RI 所見および腫瘍縮小度, 予後について検討した。その結果, (1) 奏効率は 37% で平均生存日数は 354 日であった。(2) RI の全体的な分布と腫瘍縮小率との相関では, 肝門部および肝外集積例は 8 例中 6 例 (75%) が PD で治療効果不良であった。(3) RI の腫瘍集積度と腫瘍縮小率との相関の検討では, 腫瘍内の RI 集積が高いほど縮小効果が高い傾向が見られた。(4) RI の集積度と平均生存日数を集積のないものと非癌部と同等あるいは高い集積の群と比較するとそれぞれ 129 日, 604 日で明らかに後者の予後が良好であった。

以上, 肝転移巣の血流および薬剤分布の把握, またその治療効果予測に対する ^{99m}Tc -MAA による肝血流シンチの有用性が示唆された。

12. 乳癌の経過観察における骨シンチグラフィの検討

坂田 博道 藤光 律子 岡崎 正敏
(福岡大・放)
浜田 雄蔵 (同・一外)

過去 10 年間に骨シンチグラフィを実施した乳癌 431 例中, 初回骨シンチ陰性で, 経過観察中に骨転移が検出された 34 例について, 骨転移の検出時期について検討した。

骨転移時期は術後 1 年以内が 4 例 (12%), 1-2 年 3 例 (9%), 2-5 年 19 例 (56%), 5 年以上 8 例 (23%) で, 2 年以降に多くみられた。stage 別では, I 期 1 例 (3%), II 期 17 例 (50%), III 期 16 例 (47%) であった。組織型別では, scirrhus type に骨転移が最も多く認められた。骨転移症例では局所再発がみられたのが 17 例 (50%) と多く, 他臓器転移では肺 8 例, 肝 3 例, 皮膚 2 例であった。骨転移は肋骨, 腰椎, 胸椎, 骨盤の順に高かったが, 肩甲骨, 鎖骨, 胸骨にもそれぞれ 11 例 (32%) に認められた。

13. 骨シンチグラフィにて多発性の異常集積像が認められた Cushing 症候群の一例

近間 郁子 星 博昭 長町 茂樹
大西 隆 石川 玲子 渡邊 克司
(宮崎医大・放)
鶴田 敏博 加藤 丈司 (同・一内)

症例は 32 歳女性で, 高血圧, 無月経を主訴とし来院した。血液, 生化学検査にて低カリウム血症, 血中コルチゾール高値, 血中 ACTH 低値を呈し, Cushing 症候群と診断された。CT, MRI にて左副腎部腫瘍を認め, ^{131}I アドステロール副腎皮質シンチグラフィにて, 左副腎に一致して強集積が認められた。また骨シンチグラフィでは, 両側肋骨, 骨盤に多発性の異常集積が認められた。術後, 腫瘍は病理学的に副腎腺腫と診断され, 骨シンチグラフィ上の多発性異常集積は, 腫瘍のコルチゾール産生過剰に基づく骨粗鬆症およびこれに伴う病的骨折によるものと考えられ, Cushing 症候群では留意すべき所見と思われた。